

長寿医療研究開発費 2025年度 総括研究報告（総合報告）

高齢者の特徴をふまえた高齢者看護モデル作成に関する研究（24－25）

主任研究者 山田 小桜里 国立長寿医療研究センター 看護師長

研究要旨

国内において増加する高齢者層に対し、働き手となる生産年齢層が減少するという人口構造は、病院内でも職員不足等に影響しており医療提供体制の危機に直面している。この問題解決手段として、入院期間の遷延化防止や在宅療養の推進、デジタル・トランスフォーメーション（以下、DX）の導入といった取り組みは、診療報酬にも紐づけられ国として活用実践が勧められており、看護提供体制にも変革が求められている。

当センター看護部では、キャリアラダーに高齢者の特徴を組み込んだ研修プログラムを実施している。認知症認定看護師や老人看護専門看護師が研修の監修や講師として加わることにより、専門的知識を取り入れた教育体制が構築されており、実践の場で生かされている。それらの知見を生かして、あらゆる形態の病院でも利用できるような看護モデルを提案することで、高齢化に伴う医療ニーズの変化に対応した高齢者看護の指針作成に貢献したいと考えた。

「高齢者術後看護実践ガイド」により高齢者にとって重要な QOL の維持や心身の尊厳を守ることの大切さを説きつつ治療早期から遷延化防止を図り、在宅復帰を目指すリハビリテーション看護について課題抽出を展開し、人的資源に代わるデジタルの可能性を考察して看護の質を担保もしくは向上させる、という視点で高齢者看護モデルの構築に取り組んだので報告する。

主任研究者

山田小桜里 国立長寿医療研究センター 看護部（看護師長）

分担研究者

近藤 和泉 国立長寿医療研究センター 副院長室（客員研究委員）

瀨瀬 伸子 国立長寿医療研究センター 看護部（看護部長）

野々川陽子 国立長寿医療研究センター 看護部（外来研究員）

木ノ下智康 国立長寿医療研究センター 臨床研究支援部（室長）（2025 年度のみ）

西崎 洋二 国立長寿医療研究センター 看護部（看護師）

井上 和世	国立長寿医療研究センター	看護部（看護師長）（2024 年度のみ）
阿部 卓司	国立長寿医療研究センター	看護部（看護師長）（2024 年度のみ）
前川 裕子	国立長寿医療研究センター	看護部（副看護師長）（2025 年度のみ）
伊藤 直子	国立長寿医療研究センター	看護部（副看護師長）（2025 年度のみ）
榊原 早苗	国立長寿医療研究センター	看護部（看護師）（2025 年度のみ）
荒井 有紀	国立長寿医療研究センター	看護部（看護師）（2025 年度のみ）
新美 千佳	国立長寿医療研究センター	看護部（副看護師長）
松浦 悠子	国立長寿医療研究センター	看護部（副看護師長）
臼田 真菜	国立長寿医療研究センター	看護部（看護師）
出口 澄佳	国立長寿医療研究センター	看護部（看護師）
サブレ森田さゆり	国立長寿医療研究センター	代謝・内分泌部（外来研究員）
山本 明子	長良医療センター	看護部（外来研究員）
藤原奈佳子	岐阜保健大学	教授

研究期間 2024年4月1日～2025年3月31日

A. 研究目的

1. 高齢者患者の治療開始早期から、その人らしさを支援し、心身の尊厳を重要視しつつも安全・安楽を保つことのできる看護の提供方法を「高齢者術後看護実践ガイド（以下、ガイド）」として示す。入院期間を遷延化させない取組みとしてガイドの使用評価を行い、精査修正して発信していく。
2. 自宅退院を希望する高齢患者の意志に寄り添い、回復期においてリハビリテーション（以下、リハビリ）看護介入しているが、実際は希望に沿わない退院先に至るケースがある。その要因を明らかにし、回復期における看護師の役割を考察することで退院先の希望実現へのアプローチ方法を考える。
3. 加齢による情報処理能力や記憶力の低下といった高齢者の特徴は、情報量の多い複雑な入院オリエンテーション内容の理解を困難にしている。説明の均質化や人員不足の解消として DX 導入を試みているが、デジタルによるオリエンテーションは高齢者にとって効果的に活用できるかを調査し検討する。

B. 研究方法

1. 文献の系統的レビューを行った上でノミナルグループ法での投票による合意形成を行い、ガイドを作成した。当初、愛知県内の 300 床以上の急性期に対応する施設をランダムに介入群、非介入群と 2 群に分け、術後管理する病棟の看護師を対象に使用に関する

る調査を行う予定であったが、対象施設の再選定などが必要となり、ガイドの導入によるアウトカム指標等を修正し介入研究計画書の修正を行う。

2. 2019年4月～2023年3月に当院の回復期リハビリテーション病棟を退院した75歳以上の患者636名分のカルテデータの中から条件検索し、313名を抽出し対象とした。後方視的に「看護必要度」と「The standing test for imbalance and disequilibrium (以下 SIDE)」の評価項目のデータを収集し、SPSSを用いて多変量解析を行った。分析結果から在宅復帰に影響を与える要因を明らかにした。
3. 「新たなオリエンテーション (新オリ)」で説明を受けた入院予定患者を対象に実施された理解度等に関するアンケート調査の結果と、認知機能や感覚器機能等の特性との関連について後ろ向きに調査し検討した。解析方法は変数の種類や収集されたデータの分布に応じて設定し、主に相関係数を用いた。

(倫理面への配慮)

研究の実施にあたり、倫理については、人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針等にそって実施した。また、国立長寿医療研究センターの倫理・利益相反委員会へ申請し、承認を受けてから実施した。この研究において利益相反はない。

C. 研究結果

1. ガイドの作成にあたり、先行研究におけるフォーカスグループインタビューのデータを抽出しつつ修正しながらまとめた。ケアを“行うことを推奨する”という投票結果の多かった項目をケア内容として掲載することとし、ノミナルグループによる2回のアンケート結果を反映させることで掲載項目の優先度を高めた。介入研究に至る段階で研究計画書の修正が必要となり、作成途中で終了した。
2. 回復期病棟には主に脳血管系、運動器系疾患の患者が入院されるが、自宅退院に至る患者の割合は運動器系患者の方が多かった。また、自宅退院患者はSIDEや看護必要度の改善率が高かった。退院後も医療行為を継続する患者の退院先は非自宅の割合が多かった。疾病罹患や受傷により、退院後に課題を抱えることになる患者の自宅退院が困難となっている。
3. 動画視聴後のアンケートにより、年齢別の理解度は家族の同席があれば80%以上の理解度が得られ、同席率は年齢が高いほど上がった。また、認知機能別の理解度は家族の同席があれば80%以上の理解度が得られ、同席率はMMSE-J点数が低いほど上がった。質問機会が不十分であった患者より十分あった患者の方が理解度が高かった。オリエンテーションの所要時間は、新オリの方が全体の所要時間が長くなったが対面の説明時間は短縮した。

D. 考察と結論

高齢者にとって非日常的な入院生活は、治療の場でありながらも状況次第では心身へ侵襲を与えかねない環境となる。せん妄の出現や意欲の減退、理解不足による不安感の増長等は病状回復を妨げ、入院前の心身状態よりも悪化を招いてしまうケースも少なくない。

「急性期」「慢性期」「回復期」「生活維持期」それぞれのステージで、高齢者の特徴に合わせた適切なケア提供や支援を行うことにより、侵襲となる要因を取り除くことが重要な課題であるということが研究結果により示唆された。今回、3研究のデータ解析を進め、高齢者医療専門研究機関として看護の提供方法を検討したことで、現代の医療ニーズに対応できる有用な高齢者看護モデルを提唱することの一助となったと考える。

E. 健康危険情報

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

2024 年度

- 1) ○山本明子, 藤原奈佳子, 野々川陽子「高齢者医療研究施設看護師の提供する高齢者術後看護実践の根拠」老年看護学会第 29 回学術集会 2024.6.29-30, (高知)
- 2) ○山本明子, 臼田真菜, 藤原奈佳子, 越中のり子, 野々川陽子, 瀬瀬伸子「ノミナルグループ法を用いた “高齢者術後看護実践のガイド” の検討」: 第 1 報 日本ヒューマンヘルスケア学会第 7 回学術集会 2024.11.9, (島根)

2025 年度

- 1) ○山本明子, 臼田真菜, 藤原奈佳子, 野々川陽子, 瀬瀬伸子「ノミナルグループ法を用いた “高齢者術後看護実践のガイド” の検討」日本ヒューマンヘルスケア学会第 8 回学術集会 2025.9.20, (Web 開催)
- 2) ○山本明子, 臼田真菜, 藤原奈佳子, 野々川陽子「高度急性期病院と高齢者医療研究施設の看護師が考える高齢者術後看護ケアと入院期間の遷延化防止の関係」第 79 回国立病院総合医学会 2025.11.7-8, (金沢)
- 3) ○西崎洋二, サブレ森田さゆり, 松村純, 松浦悠子, 出口澄佳, 加賀谷斉「回復期リハビリテーション病棟における後期高齢者の自宅復帰に影響を与える要因の検討～看護必要度・SIDE に焦点を当てて～」回復期リハビリテーション病棟協会

第 47 回研究大会 2026. 2. 6 (米子)

2026 年度予定

- 1) ○山田小桜里, 木ノ下智康, 前川 裕子, 伊藤 直子, 榊原 早苗, 荒井 有紀「動画を使ったオリエンテーションの高齢者への影響と効果について」第 57 回日本看護学会学術集会 2026.9.18~20 (岡山)

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし